



Title	W.C.ミッチェル(制度学派と循環学説)
Author(s)	渡邊, 侃
Citation	北海道大學 經濟學研究, 10, 1-13
Issue Date	1956
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/31022
Type	bulletin (article)
File Information	10_P1-13.pdf



[Instructions for use](#)

W · C · ミッチェル

(制度学派と循環学説)

渡 辺 侃

ウエスレー・クレア・ミッチェルに就いて一文を草する所以は、彼が米国に於ける経済循環論の先駆的著者だからであるが、またいわゆる制度派学者の一人と看做さるるからである。¹⁾制度派学者とは、シカゴ大学を中心としてノースウェスタン大学やウィスコンシン大学等に居た、デューイ、ヴェブレン、イリー、コンモンズ等を指し、最近の農業経済学者T・シュルツ中心の学者も入れてよい。(ミッチェル自身師にして友なるヴェブレン及びコンモンズの評伝を書いて居る。)これに対抗するものはハーヴァード大学を中心として居る古典的理論経済学者J・B・クラーク、セリグマン・タウジック、T・N・カーヴァー等があげられ、また、特に最近までの農業経済学者をしてJ・D・ブラックを挙げる事が出来る。

筆者が在職した北海道大学農業経済学科の先生方は制度学派的色彩があつた。故人となられた佐藤昌介、新渡戸稲造、森本厚吉の諸先生が、当時新興の大学たりしフィラデルフィアのジョンズ・ホプキンス大学で、故イリー先生につかれた。佐藤昌介先生に以て経済学という訳本があり、森本厚吉先生は我々にイリー著経済進化論を講義された。

イリー先生は後にノースウェスタン大学に移られ、そこで中島九郎、松田武雄両先生が学ばれた。イリー先生は独逸に学び、その歴史派乃至社会政策学派（講壇社会主義者）の学説を伝えたので、同じく独逸に学ばれた高岡熊雄先生や上原徹三郎先生はイリー先生と同学と考えられる。即ち北海道大学農業経済学科の伝統は歴史制度学説と見られる。

筆者は大正初期学生時代恰も出版された、当時ハーヴァード大学教授たりしカーヴァー先生の農村経済学を耽読した。同学の奥田或氏は直接カーヴァー先生につき、先輩菅菊太郎氏と同書を翻譯出版した。奥田、菅両氏共其の後歴史及び地理的調査研究をされた。カーヴァー先生には分配論の著があり、いづれも限界効用乃至限界生産力学説であるから、今では古典理論派と見做される。筆者は其の後、農業経済学の内独逸のアーレボーの諸著を耽読したが、これまたチューネンの伝統をつぐ限界生産力説に立つて居る。また経済原論ではA・マーシャルからH・L・ムーアのものを読み、更にH・シュルツを研究した。（氏はT・シュルツの先にシカゴ大学に居たが純理と統計の学者で制度派でない。）傍らJ・M・ケーンズを研究した。ケーンズがマーシャルの一面を發展させ、弾性数理を応用したことを筆者は先著で明かにした。T・シュルツは弾性把握に立つて居るから繋がりはある。彼はアイオワ大学に居、その伝統は統計数理的と見られるが、シカゴ大学風の制度派に近ずいて居る。理論と計測を發展させていない。

A・マーシャルの学説について居ると思われるH・L・ムーアは独創的な学者であつたが、その学説に不統一なるものがある。即ち統計から始まり天文に原因を求めた自然及び経済の循環的波動論と、数学理論から出た需要及び供給の数式との調和がとれていない。需要及び供給の不調和の推理から其の後H・シュルツ等の蜘蛛巣理論なる循環波動論が出た。しかしそれは経済内発的なもので、天文に原因する周期説と調和がとれない。筆者は遂に需要供給の調査其自身に潜む不安定と天文周期を結合することになつたので、内発的な蜘蛛巣的波動を重要でないとせねばならなく

なつた。J・A・シユムペーターは蜘蛛巣定理を評して実用的かも知れぬが学理的でないとする。

かくして筆者は經濟循環を資本主義的利潤獲得社会独特のものと考えなくなつた。閉鎖封建的勞作主義社会に於ては旱魃と雨湿、寒冷と暑熱、それぞれ対照される毎年氣候が周期的變化をすることによる豊凶の波があり、その対策の波がある。ソヴェート・ロシアの政策の變化にはその影響の著しきものがあると思われる。例えば旱魃食糧不足の後對外政策が弱化した對内的に治水計画が表わるる如きである。資本主義社会では農産物豊凶の影響はないか或は程度の低いものとせられ、また一時的には豊作饑饉等と呼ばれる反對の現象もあるが、豊凶直接或は豊凶を起す原因たる太陽輻射活動の影響が、普通には知覚されぬが、巨大な作用をしているものと思われる。すなわち、世界的に農産が豊かな年柄が景氣もよい年柄となる。而も後の景氣が農産よりも早く起つて居る様に見え、それが三十四年、八一二年——一二年の二周期の複合の波に来て居るものと見られる。かかる天文的原因がなければ正確な三十四年、八一二年二五——五〇年の波はあり得ないのである。⁽³⁾

此事に就ては別に書いたものがあるから詳説はしない。經濟循環の実証家としてのミツチエルを評伝する。

二

W・C・ミツチエルは米國南北戦争時代軍医であつた父と教養ある母との間に長子として一八七四年イリノイス州ラッシニビルに生れた。父が落馬等の骨折で困しみ、度々居を替えたが、デカターで果樹園を持ち子等を働かせたので彼は少年時代から仕事を助んだ。十九才のときそのころ新設のシカゴ大学に学び、かたわら弟を主とする果樹園の仕事が続けた。シカゴ大学の有名な教授がヂューイとヴェブレンで近ずきになり後まで交つた。特にヂューイは彼を哲學のスカラーに推した。經濟學の教授はラプリンで彼を經濟學のフェローに推した。後者の指導によつてその専門な

る貨幣論の研究を指導され、独逸留学と助手任命を受けた。フェローは年三二〇弗、アシスタントは月二〇弗の手当に過ぎなかつたが、貧乏暮しになれていたので不平はなかつた。一八九九—一九〇〇年に主府で役所勤めをしたが、独自の仕事をしたく、シカゴ大学の講師の口がかかると喜んで帰つた。トリビュン誌に寄稿したことがあるが、記者も妥協がいると感じてやめた。加州大学から教授の口がかかつてそこと移つた。金と時の余裕があつたので山地等を数日もかけて歩き廻つたりし、其仲間の縁でルーシーと結婚した。時に彼三七歳、彼女三三歳であつた。結婚するとすぐ加州大学をやめ、夫妻で欧州の旅行をした。まず、シシリー島のタオルミナで遊び、ついでイタリーのアペニン山脈を縦走し、チロールのベルヒテスガデンまで行つた。帰途独・仏・英の学者を訪問し、ロンドンではウエップ夫妻やG・B・ショウの社会主義演説もきいた。七カ月の旅行から帰つた彼を待受けて迎えたのはニューヨーク市のコロンビア大学であつた。そのの教授をして一九四四年辞任まで勤めた。金も出来、七〇エーカーもある農場や、粗末ながら別荘も持つた。そこに家具木工の仕事場があり、子供達は父を大工だと思つていたという。建康で器用で熱心であつた。十六歳のとき心臓病と見られたが其の後何事もなく、一度湖水で泳いで溺れかけたことがある。いささか思切つたかるはずみの面もあつたが、それだけ並外れた仕事をした。

彼は快活で寛容であつて、組織力が大きく、経済研究国局(N・B・E・R)の開設運営や、ハーディング及びブルーズベルト大統領の研究委員、計画局員を主宰して貢献した。学者としての名譽も、米国内のみならず世界的に各大学から名譽学位が贈られ、諸学会の長とされ、大学教授退職の際記念論文集が出、また彼が一九四八年に死んだ後、経済科学者ウエスレー・クレイア・ミッチェルなる評伝が出て居る等により実現された。

経済研究国局にS・クズネツツ、F・C・ミルズ、A・バーンズ、P・アブラモビツツ等の錚々たる学者がいて、いずれも克明な経済統計分析をしている。最近バーンズはアイゼンハウアー大統領の経済顧問として重きをなして居る。

ミツチエルの学問的業績はシカゴ時代のラブリンの指導による貨幣論で、特にいわゆる緑背紙幣グリーンバックすなわち特に米國南北戦争の際に濫發された弗紙幣、或は一般的に紙幣の問題を研究したものである。ラブリンは紙幣濫發の害すなわちインフレーションを攻撃する一方であつたが、ミツチエルは其の必要な面も認めたという。その後の研究に於ても貨幣面が重要となつて居る。稍々通俗的な文書に金銭費消の退歩的方法といふのがあつた。

社会生活のために交換が行われるが、其の用具としての貨幣があつて、大規模な秩序ある協力が起り、自由なる個人の結合が行われる。諸物価の複雑なる体系の指標によつて、個人はその生活を立てるために、適度と思ふ行動をする。貨幣は一面人間の自由を拡大し、他面その制限なる計算・予備及び自恃カルクエレーチング・プロビデント・セルフ・ライアントを持たすこととなる。それらの多くを持つたものが他を抜いて行く。先行者が他人を搾取し利得するが、それにしても広い見地からすれば、金をあましたもの（節約者）が一般消費者に奉仕することになる。即ち全社会が支払能力ある費消者（即ち有効需要）の購買要求物を最も有能面に供給するもの、指揮下に仕事を進めることになつて居る。もつともかかる体系下で、財貨の生産及び分配が加速的に進められ、貨幣制度の技術的緊迫テクニカル・エキシゼンシから起る危険が、新しく國民を、おびやかすことになつた。かかる両極分解によつて貨幣經濟が經濟循環に反応するといふ。レスポンスナル

四

思うに、いわゆる主観的な充分の計算のない消費生活に対して、いわば客観的に價格に基づく収益と生産費に基づ

く費用を比較し純益を計算する生産生活があり、後者が貨幣経済的だとも云えるが、前者が貨幣収益で拘束されるのに対し、後者が信用経済などで貨幣に拘束されぬ点もある。所得と消費の喰違いをい、投資と雇備さらに生産の關係をいうのはケーンズ以来のことである。此間の遅延促進の關係が循環波動の原因であるというのが最近の理論である。その中心に於て貨幣があるわけだが、貨幣自体から発する循環変動とは如何なるものであろうか。米英の学者には日本やフランス・イタリー・独逸等についたインフレーションのことはよくわからぬであらう。それは循環波動などというものでなく一方的に促進される破綻である。もしインフレーションの極に於て、一種貨幣が無価値になり別の貨幣が発行されて、更にかかる破綻にいたる如きことを繰返すなれば、物価変動の状況は図形で示して正切曲線の如くなる。普通の循環波動の型なる正弦曲線とはならないであらう。反対に貨幣を収縮して事業を整理し再建を促すとすれば、事業の量即ち産出量に循環波動サイクルが起る様でもある如くである。

或はかかる極端まで行かぬ内に、貨幣が自動的に収縮する(フィードバック)様なことが出来れば、普通の循環波動の型なる正弦曲線サインカーブを示すこともあり得よう。之等の場合其の周期性は貨幣切替の時期到来の期間の様でもある。その際切替は制度的政策的のものとなる。併し事実としてかかることがあり得るだらうか。

貨幣増発を制限することに一目的を持つ金本位制度が有効に働いている米国の研究家であり、第一次大戦以前で日本や歐洲諸国も金本位制が採られた時代のこと、ミツェルがその経済循環論の最初のものを出した一九一三年までは、貨幣其の他流通手段には上限があり、好景気で投資が盛んになつてもその上限に制限された。銀行が融資を拒む以前に価格の上昇が止まつたわけであり、或は累積的漸次的に価格上昇を止めるものであつた。

緩和的な作用が急運動を制した転ずるから、危機より恐慌に進むには何か突発事故があり、特にそれが銀行の組織及び運営から起ることに重要性があつた。最近では銀行の組織及び運営が改善され、危機から恐慌に進むことは少

くなつたが、貨幣操作が多くなつたから、ひよつとすると長期間に危機の累積の様なきことが起り、反動的に長期的沈滞が起るかも知れぬ。斯かる意味に於て、経済循環変動は、経済の組織及び運営によつて周期性を變ずることや、それがなくなつたり激化することもあり得るわけである。かかる事情を一般的に考えると、いわゆる経済循環変動の一般性は不定であり、或は否定されることにもなりそうである。しかるにも拘らず循環変動が止まないのは何故であるうか。それが経済学の大問題となる。

五

ミツチエルが^{インスティテューションズトピレオリスト}制度派行動派と呼ばれる所以は理論を重んぜず実証を主とすることにあつた。論理が立つよりは実用がどうかを問うたという。或は概括的な歴史よりは詳細な計測統計を集積することに重点を置いた。シュムペーターはミツチエルを批判し、限界効用理論や弾性把握を理解しなかつたとする様である。ミツチエル自身リカードーやウィーザーやマーシャルの学説を紹介批判して居るのであるが、恐らく数学が不得手でそれによる理解の補助が得られなかつたであらう。もつとも上記三人の学説が数理を以て説明されたわけでもないし、或は数理でも簡単に連立方程式を解く様な(ワルラス一般均衡理論、リニアプログラミング、レオンチエフ表等)、極端にまで行くこともある。中間の健全なるものとして限界効用均等、限界生産力報酬論を挙げるのが出来、それが真の経済原則、すなわち普通には最初の費用を以て最大の効果をあげるといわれるものの、実は費用と収益の差額即ち純収益総額最大を目指すことを原則とし、社会はそれに進んで居る、ということを理解したかどうかの問題である。それは個々の意志或は行動が全体の内に総合されるという考え方である。しかし反面に全体としての各種事物のそれぞれの総体の変動とい考え方もある。それを変化率と呼ぶならば夫々の事物の変化率の比の如きものを出し、それを^{エラスティシティー}弾性とする。変化

率を、総体と他は同一としての其種の変化の比率とすれば部分弾性となる。その部分弾性の概念を、一種生産物とそれに用うる生産手段のそれぞれに拡げ、それらの比率の総和が一であるとすれば、そこに一種生産物の価格と、その生産費、即ち生産要素の限界生産力と、その用役量の積の総和とが等しいことが起る。その状態を閉鎖静態経済という。其の状態に於いてはケーンズのあげた様に、所得は消費と投資に分たれ、消費対所得の比率なる消費性向は投資対所得の率の累積なる乗数と逆関係になる。またその形に於いて消費、節約投資、所得が対立するわけである。というのは閉鎖静態に於て所得が何等かの形で、時間的ずれがあつても、費消されつくすからである。

六

一般的にいつて、生産物が消費され再生産が続行するのであるから、生産と消費の繰返の内に、時間的には価値の流れがあると考えられ、同時に断面を見れば種々のいわば価値形態が種々の関連をして存在して居ると見られる。それらの形態と関連とを所と時を通じて表現する場合に同一種の価値の和、例えば貨幣価値の総和に表現し得ること自身条件付である。数学的にいわゆる一次同次の関係がその条件となる。経済学的にその条件を如何に解するか。しばしば^{プロポーションナリティー}比例性が主張されるが、一般的に可能な条件ではない。筆者は、貨幣価値が変化する場合、一斉に価格が変化する、その落付の状態をとり、それを^{ストックステイト}経済の静態と考えてよいと思う。その到着に達するまで、諸物価等の変化が、それぞれ違つた経過をするのが^{ダイナミックプロセス}動態である。大体此間に物価を變ずるわけは需給物量の変化があるからで、単なる物価變動は貨幣的にしか考えられない。ミツチエルが考えた循環変化を純化すればかくの如きものとも考えられる。

シユムペーターに拠ると、クレマン・ジュグラーは經濟恐慌周期以上の波動循環周期を考えた人であり、其の方法及び原理的説明に於てミツチエルに近似している。「不況の唯一の原因は好況であること……不況は好況中に発生した事柄に対する反動である……經濟過程のあらゆる局面は次の局面を生む」という説である。或は「經濟過程は本質的に波動的である。この經濟循環は資本主義發展の形態である……利潤こそ景氣變動を説き明かす端緒であると宣言した……ミツチエルはこれ以上に進んで危きに陥らない」と。またこれに根本的に対立する議論は「經濟過程が本質的に波動のないものであつて、従つて經濟循環の説明は他の變動と同じくこの平静な流れを攪乱する特別の（貨幣其他の）事情のうちに追求されねばならぬという論理がある。マーシャルはこの仮説を代表する」と。

同じく「アフタリオンの著作はミツチエルと方法に於ては類似の精神で書かれ……一九一三に現われた。」また「シユピートホッフは……利用し得ず」（大冊の國家學辭典の一項目として最初出—邦訳あり—最近単行本になつて出た。その経過は珍らしいものとせらる。）対象なる波はミツチエルのものより長期のものであるから、「一九二五年に至るまではその立つ事實の多くの根拠を現わして居なかつた。「ハーバラーはツガン・バラノウスキーをシユピートホッフの先驅者と称するが……除外した方がいいと思う。……現存のいろいろな説明を……ミツチエル……は真しやかだが込入つているとなし、多くは真理の一部を伝えるに過ぎず、すべて共通な地盤に載せられて事實という法廷で裁きを待たねばならぬものと見做した。」

八

ミツチエルが考えた循環波動は比較的短期小規模のものである。長期大規模の波動、特に戦争によつて起る波動がコンドラチエフ波と呼ばれるものであるが、その際諸種の経済関係の変化が時期と速度と程度を異にして起ることの研究は、スピートホッフ等のやつた仕事である。米国でもワレン等のやつたのはそれに類する。それは二十五年から五十年にいう長期のものである。それに対してミツチエルやムーアがやつたものは三十四年の波と八十二年の波との両者及びその複合の様なものである。米国では三十四年の波だが、欧州では五年の波が主だという。十年内外の波は恐慌の周期から始まり中期波動としてシエボンスやシュグラーが欧州で認め、本邦では戦争周期となつていたものである。その原因をシエボンスは約十年の大陽黒点の消長に帰し、ムーアは金星の約八年の近日周期に求めた。三十四年の波については説明がない。ワレンは豚飼の社会経済関係に就いて自律的で特有なものだとするが、外にも同様な周期があり、其の時期を大体同じくしているから、特有ではない。シユムペーターは全経済界に波動の根底があつて、個々の経済はそれを反映して其の構造によつて長短の波動をする、或はそれを顕著に反映するものと考へた。しかし全経済界の波動の根底を企業者活動の波として、その原因をつきとめたとは必らずしも云えない。米国で三十四年周期の経済循環を太陽白点の消長と結んで考へたものがある。筆者は太陽黒点の位置(太陽緯度)の変化に関係があると思つてゐる。アキコ。

九

W・C・ミツチエルは獨創的な学者とはいわれない。理論は寧ろ好まない。実用を考へた様である。そこで実測統計

を累積した経験論となる。経験論は概括的には歴史制度論的なものになるのでコンモンズの研究の様なものにもなる。もつともコンモンズは制度を法制的に見たから経済学と法学とを包括した。ミツチエルは計測統計に重点を置いたから別になつた。天文的な自然原因による周期的循環波動を、その経済循環論の出發に於いては脚註程度に記載したが後には本文の主位に置き、ゾンバルトの説を引いて、自然原因と社会経済条件との交錯に周期的循環波動の起源を求めた様である。起源はともかくとしてその実情を典型的なものに作り上げる試みを始めたといつてよい。かかる経験の典型を作るのが最近の一派の仕事である。

要するに、ミツチエルの経済循環変動の把握は実証的なものである。その方法と結果は特に二つの報告書、一九四六年バーンズと共著で出した「経済循環の測定」と一九五一年ミツチエルの名で出し、大体彼の筆になつた「経済循環中何が起るか」(研究経済報告)とに現われて居る。其の概要を書いて見る。

先ず個別循環を取る。『これは月平均数字系列の季節変動を除いたものの山から山又は谷から谷をとつて一年以上十乃至十二年以下の間に継続する波動である。経済事象で必ずしも総てに波があるわけではない。或種の価格は何等かの方法で固定され、而も急に別の水準に上下されて居る。米英間の金の現送の如きは系列をなさない断続である等。しかし米国で集めた八三〇の事象の月別又は季別の数の九五％は循環波動を示している。而してこれらの山や谷が一定時期に集中する事実がある。』もとより一般的経済活動なる觀念は疑わしいものだが、循環的行動の一致は認められる。そこで対照循環の結節を劃することは出来る。かくして個別循環をその結節時間で切つて重ね合せ平均型を作る操作をするのである。(後著第三章「循環的行動の測定方法」)

対照循環結節は九に切られる。第一は谷底の三ヵ月、同じく第五が山頂の三ヵ月、第二、第三、第四が上昇期、第

六、第七、第八が下降のそれ、第九が第一と同じくなる。基準の意味が判る。これら経済事象の循環は殊別循環と呼ばれる。殊別循環は平均されて基準循環に作り上げられるのである。

これらの方法はミツチェル独特のもので、経済循環現象の客観化をねらつたものであるが、苦勞した程の効果があつては疑われる。同様の方法としてシュビートホッフのものがあるが、それは対象が戦争を中心とした長期波動であつて其の方が重要であらう。ただ短期三―四年の経済波動の性質は明かにせられるのであるが、それから發展する経済学はあまり見られない。制度学派には理論が出来ないのではなからうか。(一九五六・四・二)

(1) W. C. Mitchell: The Backward Art of Spending Money. 1937.

内容

1. The Backward Art of Spending Money.
2. Quantitative Analysis in Economic Theory.
3. Statistics and Government.
4. Institute for Research in Social Sciences.
5. Researches in the Social Sciences.
6. Social Science and National Planning.
7. Intelligence and the Guidance of Economic Evolution.
8. Making Goods and Making Money.
9. The Role of Money in Economic Theory.
10. Bentham's Felicific Calculus.
11. Postulates and Preoccupations of Ricardian Economics.

12. Wieser's Theory of Social Economics.
 13. Sombart's Hochkapitalismus,
 14. Thornstein Veblen.
 15. Commons on Institutional Economics.
 16. Prospects of Economics.
 17. Economics, 1904-1929.
- (2) H. L. Moor: Economic Cycles, their Law and Cause. 1914.
 ————: Generating Economic Cycles. 1923.
 ————: Forecasting of the yield and the Price of Cotton, 1917.
 ————: Synthetic Economics. 1929.
- (3) 渡辺 侃: 農業経済学 昭和二十四年
- (3) (2) 渡辺: 豊凶三年周期の説明(農業及び園芸) 昭和三十一年二月
- (4) 高橋長太郎訳: シ・ユムベーター稿、十人の経済学者の内ミッチェル 昭和二十七年
- (5) Wesley Clair Mitchell: edited by A. F. Burns. 1952.
 ————: Business Cycles. 1913.
 ————: Business Cycles, the Problem and its Setting. 1927
- (6) G. F. Warren & F. A. Pearson: The Agrcultural Situation. 1924.
- (7) W. C. Mitchell: what Happens during Business Cycles. 1951.
- (8) W. C. Mitchell & A. F. Burns: Measuring Business Cycles. 1946.
- (9) A. Spiethoff: Die wirtschaftliche Wechsellen. 1955.